

同時に、また日本気象学の発展を招来するものとなるであろう。

おわりに、この拙文が総じていささか冗長に墮し、一部誇張と感傷の色を持つことを筆者もまた認めざるを得ないが、ところで、当用の文章なるものがもともと多少の説得を目的とするならば、それもまたよしとせねばな

らぬであろう。もっとも、これをもし筆者の精神年令に帰せんとされるならば、それも読者の自由というものである。「桃季モノ云ハザレド、下オノヅカラ径ヲナス」かかる高士にとって当用の文字はすべて無用となるか、
阿々。
(29 Nov., 1968)

=新刊紹介=

がんぼ
岸保勘三郎著

数値予報新講

地人書館、新気象学薦書
(B 6版・180頁・550円)

題名は「数値予報新講」ですが、むしろ気象力学の一般向き入門書といった方がよいかもしれません。本書は、単に方程式をならべて文章で説明するだけにとどまらず、その実際例を豊富な天気図、それもすべて日本を中心としたアジア地域のもので示してあるため、一般の読者にもしたしみやすく、また理解がしやすいものとなったと思います。

もとより、数値予報とは気象力学の理論を実際の気象に適用して将来の予報天気図をつくることであり、しかも現在ではすでに数値予報が十分実用化していることを考えるならば、気象力学のアウトラインを解説するには

数値予報をもってくるのが案外近道なのかもしれません、

従来、天気図をあつかう入門書は、天気図のかき方とか経験論的予報技術の解説書にとどまりがちだっただけに、本書はまた一歩進んだ天気図の解説書ともいえます。本書では当然のことながら、高層天気図、それもうず度分布図がしばしばでてきます。数値予報は上層のうず度の流れを追跡することを主要な目的としている——といいきっています。いままでの解説書は地上天気図を偏重し、高層天気図はむずかしいものとして軽くあつかう傾向がありました。なお天気図のかき方の点でも本書は手ぬかりなく「客観的解析」という章をもうけています。

少い紙面に多くのことをもりこんであるため、説明が大ざっぱになったことはやむをえないとおもいます。個々の問題点やゆきとどかぬ点は読者の指摘にまつこととして、まずは気象をかたる人々の一読をおすすめしたいとおもいます。
(丸山健人)

A.E. メニチュコフ著 (倉島厚・小山謙訳)

自然の道しるべ

—時と方位のオリエンテーション—

総合図書 251頁 650円

この本には、特別な測器をもたない人間が自然の中におかれたとき、時と方位についてどれだけのことを知ることができるか書かれている。そのためには月や星や太陽はもちろんのこと、自然の景観や動・植物などさまざまな“自然の道しるべ”が利用される。たとえばイヌホーヅキの花冠が開くのは午前5時～6時であり、ステップに生えるアキノノゲシは茎の葉を南北方向に広げているという。

時と方法に関する実用的な知識を整理した点に本書の

第1の特色があるが、自然観察に関する一般的読み方としても面白い。世界の自然帯の説明にはじまり、宇宙における方位測定の話でおわる本書の構成から考えて、著者の意図の一つもそこにあったものと思われる。

訳文はなめらかであり、ソ連の事情にうとい読者に対する注も親切である。情報過剰な都会生活からはなれて、本書とともに自然の中で数日をすごしてみたいという気持を起こさせる本である。(根根 勇)